



Title	日本語の動詞連用形を主要部とする動名詞の複合について
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 89-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の動詞連用形を主要部とする動名詞の複合について*

由本陽子

1. はじめに

日本語の名詞が動詞の連用形と結合した複合語(以下[N+V]複合語)には(1)-(3)に挙げるように様々な意味を表すものが存在する。また、その用法・統語的性質にも多様性が見られ、(1)の中でヒトやモノなど具体物を表す場合は当然純粋な名詞であるが、(2)のように直接「する」と結合して動詞として用いることができるものや、(3)のように「だ」と結合して述部を形成し、また、「の」を介して名詞の属性を描写するものなどもある。意味と用法・統語的性質との間には若干のずれがあり、行為や現象を表すものでも(1)に分類されるものは、(4)に示すように「を」や「が」を介さなければ「する」と結合して動詞として用いることができず、(2)に挙げたものとは統語的な性質が異なっている。

- (1) a. 行為：金魚すくい、ボタンつけ、一人歩き、山登り、墓参り、里帰り
b. 現象：地滑り、崖くずれ、地響き、耳鳴り、声がれ、雪焼け、手荒れ
c. 動作主：相撲とり、風船売り d. 道具：ねじ回し、帯留め、郵便受け
e. 場所：車寄せ、ゴミ溜め、水たまり f. 時間：夕暮れ、夜明け、夜更け

(cf. 伊藤・杉岡 2002:110-111)

- (2) a. 健はいつも手紙をペン書きする。
b. 早く研究者として一人歩きしたい。
c. 花子はスキーに行って雪焼けした。
d. 救援物資を船積みするのに時間がかかった。
e. お気に入りのセーターが色落ちしてしまった。

- (3) a. トーストが黒こげだ。／ 板張りの廊下
b. 黄金虫は金持ちだ。／ 所帯持ちの社員

- (4) a. 金魚すくい*(を)する、山登り*(を)する、墓参り*(を)する
b. 耳鳴り*(が)する、地響き*(が)する

本稿では、[N+V]型複合語のうち、(2)のように直接「する」と結合して動詞として用いられる、すなわち動名詞としての機能が認められるものについて考察する。そもそも主要部が動詞であるのに、わざわざ動詞を名詞化してそれを「する」と結合することで改めて動詞として用いるというのは、言語の経済性に反するもののように思われる。しかし、日本語

* 本稿は、平成24年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（#24520427））の助成をうけた研究成果の一部である。

の[N+V]複合語形成は、品詞転換が関わることからレキシコンにおける語形成だと考えられ、モホーク語などにおける統語構造上で名詞を述語に編入する操作とは異なり(cf. Baker 1985)、単に動詞の意味構造に名詞概念を代入したということではなく、もとの動詞の意味構造に何らかの意味的変更を加え、新たな述語概念を作りだしているものだと考えられる。筆者は、Yumoto (2010)、由本(2010)、由本(2014)においてさまざまなタイプの[N+V]複合語が動名詞として成立し得る条件について考察してきたが、本稿ではこれまでの知見をふまえて、これらがそれぞれどのような目的で形成されるのか、その動機づけについて整理してみたい。

以下では、[N+V]複合語を次のように分類し、それぞれ形成の動機づけが少しずつ異なることを論じる。

- ①もとの動詞 (V) の付加詞が結合しているタイプ (2 節)
- ②V の項にあたる N が結合し V の結合価が減じられているタイプ (3 節)
- ③V の目的語にあたるものだが、行為や事象を表す N が結合しているタイプ (4 節)
- ④V の項にあたる N と結合しその N の意味項を新たな項として選択するタイプ (5 節)

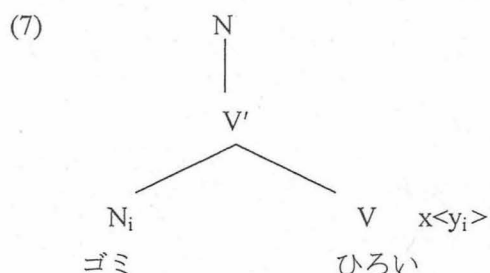
2. V の付加詞が結合した[N+V]型動名詞

Sugioka(2002)、伊藤・杉岡(2002) (以下 Sugioka で統一) は、動詞が内項と結合すると名詞として機能する複合語になるのに対して、内項以外の要素、たとえば、(5)のように道具・様態・原因などを表す付加詞と結合した場合、複雑述語として機能する述語名詞となるという一般化を示した。確かに(4)に示したように助詞を介さなければ述語機能をもたないものは、他動詞なら目的語、自動詞なら主語を含むものであるのに対して、(5)に挙げたような複合語は、(6a)のように「する」と直接結合して動作を表す動詞として使われたり、(6b)のように「だ／の」を伴って状態を表す述語として使われる (伊藤・杉岡 2002:115-122)。

- (5) a. 道具：ワープロ書き、糊付け、機械編み、手作り、水洗い
- b. 様態：一人歩き、犬死に、共食い
- c. 原因：船酔い、所帯やつれ、仕事疲れ、日焼け、飢え死に
- d. 結果状態：黒こげ、四つ割、白塗り
- e. 材料：石造り、板張り、木彫り、モヘア編み、毛織り
- (6) a. 切手を糊付けする、コオロギが共食いした、テニスで日焼けした
- b. 魚が黒こげだ、この家の廊下は板張りだ、このパンは手作りだ
 白塗りの壁、石造りの豪邸、ワープロ書きのはがき

さらに、Sugioka によれば、前者は項構造、後者は動詞の概念構造(LCS)を基盤とする異なるレベルでの複合であると考えられている。これは、後者がもとの動詞の意味を基盤として新たな述語概念を形成する語形成であることを意味している。Sugioka は、項構造と LCS を用いた分析を提案し、前者が(7)に示すように主要部 V が選択する項の一つを語内部で満たすという形の複合であるのに対して、後者は V の LCS を原則として受け継ぎながら

も(8)のように意味述語のどれかを修飾する要素を加えた複雑述語が形成されるという違いに帰せられると主張した。



- (8) a. Event[x ACT (ON y) Manner / Instrument] 一人早歩き/水洗い (する)
 b. Event [BECOME y Cause / Manner State[BE y AT-Z]] 日焼け/犬死に (する)
 c. State [BE y AT-Result] 黒こげ/四つ割 (だ／の)

(cf. Sugioka 2002)

(6)には、「する」と結合して他動詞あるいは、自動詞になるものと「だ」と結合して形容動詞のように振舞うものと三種類が示されているが、Sugiokaによればこの違いはLCSによって説明できる。結合する付加詞がVのLCS内のどの下位事象を修飾するかによって、[N+V]複合語が行為を表すか、現象(変化)を表すか、さらに、結果を表して「だ／の」と結合するかが決まる。(8a)の様態(「一人」)や道具(「水」)を表す付加詞は、LCS内の働きかけを表すACTにかかるものなので、行為を表す述語名詞を作るのに対して、(8b)の原因を表す「日」や変化の様態を表す「犬(のように)」は変化を表すBECOMEにかかるので、状態変化を表す述語名詞を作る。いっぽう、(8c)の「黒」や「四つ」は結果状態を表すので、LCS内のStateに挿入され、状態を表す述語名詞となるのである¹。

ここで注意しなければならないのは、(8)のうち(8c)だけはVのLCSの結果部分のみに焦点をあてた意味構造に変更されていることである。いっぽう(8a)(8b)においては、もとのVのLCSは基本的に受け継がれ、Nによって表される修飾概念が付加されただけである。換言すれば、これはもとのVが表す事象を何らかの形で特定化した述語概念を形成していることになる。具体的にいえば、「水洗いする」「日焼けする」は「洗う」「焼ける」によって表される事象をより特定化した下位概念を表している。これは、[N+N]型の複合語を代表とするいわゆるRoot Compoundについて共通にあてはまる複合語形成の動機だと言える。すなわち、「皿」の形や用途をより特定して新たなモノ概念を作るために「丸皿」や「ケーキ皿」といった複合名詞を形成するのである。

以上、Vの付加詞にあたる要素を複合した[N+V]型の動名詞は、もとのVが表す動詞概念を修飾要素を付加することにより特定化するというRoot Compound一般にあてはまる動機によって形成されるものであることを述べた。

¹ Sugiokaによればこのタイプの複合語は、[-V]素性をもつ述語名詞である。

3. Vの内項が結合して結合価が減じられる[N+V]型動名詞

2節で紹介した Sugioka (2002)によれば、[N+V]型複合語が動名詞として「する」と直接結合できるのは、NがVの付加詞にあたるものに限られると考えられていた。これに対して、Yumoto (2010)は、(9)のように内項との複合である[N+V]複合語の中にも直接「する」と結合するものがあることを指摘した。

(9) a. 他動詞から他動詞を作る

{パック詰め、船積み、車庫入れ、棚上げ、陸揚げ、油通し、湯通し} する

b. 他動詞から自動詞で「に」格補語をとる動詞を作る

{味付け、色づけ、意味づけ、景気づけ、動機付け、ランク付け、風入れ、
てこ入れ、砂糖がけ、駄目だし、アイロンがけ} する

c. 自動詞の「に」「から」格補語を結合して自動詞を作る

{親離れ、乳離れ、ベンチ入り、仲間入り、蔵入り、迷宮入り、客受け、
湯あたり、食あたり} する

Yumoto (ibid.)では、これらの複合語を形成しているVが二つの内項を選択するものであるという点に注目し、これらは2節で見た付加詞を結合する複合とは語形成の目的が異なっていることを指摘した。すなわち、これらは、Sugioka (2002)が提案するようなもとの動詞のLCSの一部に修飾要素が結合して形成されたというのではなく、もとの動詞が表す意味をそのまま受け継ぎながら、その表す事象の中で、もとの動詞とは異なる視点を与える目的で形成されているものだと考えられるのである。たとえば、「魚を湯通しする」と言えば、「魚を湯に通す」ということに違いないが、「湯に通す」ことによって「魚」の臭みなどが除かれたという状態変化が含意されている。「ワイシャツにアイロンがけする」という場合も、単に「ワイシャツ」に「アイロン」を使って「作用を及ぼす(『大辞泉』)のではなく、「ワイシャツ」のしわをのばすという変化まで含意している。つまり、これらの[N+V]複合語を形成しているVは本来「xがyをzに{入れる・つける・くぐらせる}」のような意味をもつ広い意味での位置変化動詞であるが、Nとの複合によりそのような事象を対象yあるいは場所zの状態変化を表すものとして捉え直したものと考えられるのである²。このことは「棚上げ」「(お)蔵入り」「風入れ(=虫干し)」のような慣用化した意味で用いられるものにおいては特に明白であり、以下に示すようにこれらには対応する動詞句に生じ得るあいまい性(cf.(10a))がないことも本稿の分析の妥当性を示すものである。

(10) a. {問題を／道具箱を} 棚に上げる、{組織に／部屋に} 新しい風を入れる

b. {問題を／*道具箱を} 棚上げする、{*組織に／部屋に} 風入れする

Yumoto (ibid.)では、(9)のタイプの[N+V]複合語動名詞の意味構造ではもとのVのLCS内にNが表す名詞概念が定項として代入された構造が、もう一つの変項の状態変化に焦点があたるようなLCSに変換され、その帰結としてその項が対象項の一種として表されると考

² このような分析の証拠となる言語事実については本稿では紙幅の制限のため論じる余裕がないが、由本(2014)に詳しく述べている。そちらを参照されたい。

えた。すなわち、たとえば、「y に味付け (する)」では、まず(11a)のように、「味」は「付ける」の LCS 内に対象項として代入される。それが(11b)のように、本来場所項である y における状態変化を表す述語概念に変換され、それが「する」と結合する動名詞となるのである³。y にあたる項が「を」で表示される場合もある (e.g. 「スープを味付けする」) という事実が、この分析の妥当性を示している。

(11) a. 味-付け_[+V]: [x] CAUSE [[FLAVOR] BECOME [[FLAVOR] BE AT-[y]]]

↓

b. [x] CAUSE [[y] ; BECOME [[y] ; BE WITH-[FLAVOR]]]

以上の分析に従えば、V の項と結合し V の結合価を一つ減じる複合語形成は、もとの V が表す事象内に参与するもう一つの内項に焦点をあて、その事象を別の観点から捉えなおすことによって動機づけられていると考えられる。このような事象構造の変換は、「壁塗り交替」と呼ばれるタイプの構文交替に極めて類似している。すなわち、「壁にペンキを塗る」においては「ペンキ」の「壁」への付着が焦点となっているのに対して、「壁をペンキで塗る」の場合は「壁」の状態変化に焦点が移っている。紙幅の制限により詳しく述べることができないが、英語のこれと対応する構文について先行研究で得られている知見が、日本語のこのタイプの[N+V]複合語にも有効であると考えられる⁴。

4. 行為を表す N が結合した[N+V]型動名詞

この節では、前節で扱ったタイプと同様に N との結合により主要部の V の結合価が一つ減じられているものの中には、N がモノ名詞ではなく何らかの事象を表し、[N+V]動名詞全体の意味において、V よりも中核的意味を担っていると考えられる場合があることを指摘する。前節(9)に挙げた例の中でも「アイロンがけ」「乳離れ」なども、それぞれ N はアイロンによって行う動作や乳を与えられる行為を表しているので、このタイプに属すると言えるかもしれないが、とりわけ N が身体部分名詞である場合にこのタイプのものが多い。(12)にその例を挙げるが、最後の「声がけ」は「お声がけする」という形式で近年定着してきた表現で、直接「する」と結合する動名詞として認められるようになったのは比較的最近であり、このことから、このタイプはある程度生産性があることがわかる。

(12) 口出し、面出し、手出し、顔出し、目配せ、目配り、気配り、口添え、
肩入れ、手入れ、足入れ、腕比べ、手合わせ 声がけ

(12)に挙げた例は、すべて直接目的語以外に「に」格や「と」格の補部をとる V を主要部としており、この点では、前節で扱ったタイプと共通性も見られる。しかしながら、複合語

³ WITH は属性の所有を表し、(12b)は FLAVOR を有する状態に変化させることを表している。

⁴ Yumoto (2010)では、このタイプの複合はその動機付けにおいて英語など他言語における(i)のような構文交替と共通性が見られるが、日本語ではあくまでもレキシコンにおける新たな述語形成であるため、より意味的制約が厳しいことを指摘した。

(i) a. John loaded hay onto the truck. / John loaded the truck with hay.
b. The price of meat fell / Meat fell in price. (cf. Levin 1993)

が形成される目的あるいは動機において両者は異なっていると考えられる。というのは、(12)の例については、それぞれ「口を出す」「目を配る」のように句にパラフレーズしてもほとんど意味が変わらないからである。前節で扱ったタイプは Yumoto (2010) に従えば、先述のとおりもとの V が表す事象を異なる観点で捉えなおしたものであり、(11)に示したような意味構造の変換を伴うものであった。その意味の変換とはすなわち、たとえば単に「付加」を表す動詞「付ける」を主要部としながら、複合語「(スープに) 味付けする」になると、「に」格補語「(スープ)」の状態変化が焦点化されたものになるということである。これに対し、(12)の例については、「に」格補語の状態変化を表すものとは言えない。では、もとの動詞句による表現とほとんど意味が変わることがないのになぜ複合語形成が起こるのだろうか。

ここで注目したいのは、これらの身体部分名詞を含む[N+V]複合語が基盤としている句表現(口を出す、気を配る)の慣用度が高いことである。これらは句の形式をとっていても一塊の述語概念として機能している複雑述語を成していると言えるだろう。さらに、それらの慣用句において、身体部分を表す名詞は比喩的意味拡張を起こしており、モノではなくむしろ身体部分に関わる行為を表している。たとえば、「口」は「意見」(「口出し」)や「助言」(「口添え」)を、「気」は「思いやり」(「気配り」)を表している⁵。

以上の考察から、本稿では(12)のタイプの[N+V]複合語は、慣用句としてレキシコンに登録された(13)のような LCS をもつ句表現に対して、具現形式のもう一つの選択肢として登録されているものとする⁶。これはもともと複雑述語をなす句構造をもっているのだから形態的にも一語、すなわち複合語として具現化することはごく自然なことであろう。また、この中には「肩入れ」「手当て」など対応する句表現がなくもっぱら複合語の形式で具現化されるものもある。

- (13) 口を出す: [x] CAUSE [[OPINION]_i] BECOME [[OPINION]_i BE AT-[y]]
→ 口出し

このように考えると、このタイプの複合語形成の目的は N が表す行為を V の意味と合成して複雑述語を作ることであると言えるだろう。これは、英語の軽動詞構文、たとえば ‘give one’s clothes a good brush’ のような例において動詞 give よりも目的語に表されている名詞 brush によって具体的な行為が表されるいっぽう、give によって、brush が表す行為を対象への働きかけという側面がよりクローズアップされた表現になっていることと通じる部分があると言えるだろう。複合動詞の形成規則がない英語ではこのような複雑述語の概念を句構造でしか表現できないのに対して、複合動詞が非常に生産的に形成される日本語ではこれを一語で表現することが可能であり、したがってこのタイプの複合動名詞が多く存在す

⁵ もしこれらが本来の身体部分としての指示対象をもたないとすれば、関係名詞として束縛される必要性はないと考えられる。したがって、「照応の島」となる語内に編入されても問題が生じないのである。詳しくは由本(2010)を参照されたい。

⁶ ここでは便宜上「口」を OPINION として表示しているが、より正確には「意見を言う」という行為を表すものとして LCS に代入されなければならない。

るのである。

5. 動詞の結合価を減じることのない[N+V]複合語形成

最後に(14)に示すように、3節4節で扱ったタイプと同様、複合語を形成しているNはVの項にあたるものであるにも関わらず、Vの結合価には変更が生じていない場合について考察する。

(14) a. 他動詞から他動詞を作る

{灰汁抜き、しみ抜き、渋抜き、値上げ、値下げ、値引き、値踏み、頭だし、格上げ、格下げ、株分け、種明かし、枝打ち、裾上げ、底上げ、色止め、口止め、品定め、塩出し、幅詰め、艶出し、首切り、高さ制限、価格統制} する

b. 自動詞から自動詞を作る

{気疲れ、気落ち、目移り、心変わり、格落ち、型崩れ、値下がり、値上がり、値崩れ、色落ち、代替わり} する

このタイプについては、単にもとのVのLCSにNが表す意味概念が代入されるという形とは異なる、Nのクオリア構造も含んだ意味をもとりこんだ複雑な意味合成のメカニズムが想定されねばならない。特に、VのLCSにはない新たな項を名詞から獲得するメカニズムを明らかにする必要がある。母語話者の直感では、Nの所有者にあたるもの、あるいはNと部分-全体の関係にあるものが、その項にあたる。実際、そのような所有関係、ないしは部分-全体関係が前提となっているようなNのみがこのタイプの語形成に関わるのであって、同じVを主要部としていても「風あげ」「くぎ抜き」「山崩れ」などは動名詞としては成立できないのはこの理由による。さらに詳しく調べてみると、この「所有関係」ないしは「部分-全体関係」というのは、たとえば身体部分やモノの部品のようなものによっては不十分であることがわかる。(14)に挙げた例で用いられているNは、「値」「格」「色」「高さ」などほとんどの場合モノの属性を決定する一側面を表す名詞である。不可分所有の関係といっても部分-全体の関係よりも密接な関係を前提とする名詞であって、それらが受けた影響はそのまま「全体」にあたるモノにも同様に及ぶと考えられるタイプの名詞である。具体的に述べれば、たとえば銀行の格を上げること（「格上げ」）は銀行を変化させること、布の色が落ちること（「色落ち」）は布が変化することを意味する。これは言い換えれば、Nにむけられた行為をそれが構成する全体のモノに及んだ影響に焦点をあてて捉えなおしているものと考えられる。これに対して、身体部分名詞をはじめとするいわゆる関係名詞を含む[N+V]複合語の場合は、(15)に示すように、Nの所有者やそれが部分をなす全体にあたる概念を要求し、「の」格で表示される項として表すにも関わらず、(16)に示すように「する」と直接結合して動詞として用いることができない。これは、「肩たたき」や「墓参り」を「肩」「墓」の所有者にあたるヒトに対する行為としては捉えられないからだと考えられる。

(15) a. お父さんの [肩-たたき]

b. お父さんの [ひげ-そり]

- c. 母親の [墓-参り] d. 朝顔の [種-まき] /
- (16) a. *お父さんを [肩-たたき]-する b. *お父さんを [ひげ-そり]-する
- c. * 母親を [墓-参り]-する d. * 朝顔を [種-まき]-する

以上の観察を踏まえて Yumoto (2010)では、このタイプの複合における意味合成を以下のように名詞のクオリア構造を用いた語彙意味表示(cf. Pustejovsky 1995) によって形式化した⁷。

$$(17) a. \text{値:} \left(\begin{array}{l} \text{ARGST=} \left(\begin{array}{l} \text{ARG1= } x \\ \text{D-ARG1= } y \end{array} \right) \\ \text{QUALIA=} \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL= } x: \text{attribute_price} \\ \text{CONST= constituent part_of } (x, y: \text{goods}) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

$$b. \text{上げる: } [x] \text{ CAUSE } [[y]; \text{BECOME } [[y]; \text{BE UP}]] \\ \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL= high } (e_2, y_2) \\ \text{AGENT= raise_act } (e_1, x_1, y_2) \end{array} \right)$$

$$(18) \text{値-上げ}_{[+V]} : [x] \text{ CAUSE } [[\text{PRICE}]_z \text{ BECOME } [[\text{PRICE}]_z \text{ BE UP}]]$$

$$\left(\begin{array}{l} \text{ARGSTR=} \left(\begin{array}{l} \text{ARG 1= } x_1 \\ \text{ARG 2= } y_2 \\ \text{S-ARG1= PRICE}_3 \\ \text{QUALIA=} \left(\begin{array}{l} \text{FORMAL= } z_3: \text{attribute_price} \\ \text{CONST= constituent part_of } (z_3, y_2: \text{goods}) \end{array} \right) \end{array} \right) \\ \text{QUALIA=} \left(\begin{array}{l} \text{part_effect} \cdot \text{whole-effect_lcp} \\ \text{FORMAL= high } (e_2, z_3) \\ \text{CONST= affect } (e_3, e_2, y_2) \\ \text{AGENT= raise_act } (e_1, x_1, z_3) \end{array} \right) \end{array} \right)$$

紙幅の都合で詳細は Yumoto (2010)を参照されたいが、大雑把に言えば、クオリア構造において何かを「構成する部分」(constituent part_of)であるという性質が記載された N が V の LCS に定項として代入されると、結合した N が要求する意味項が新たな項として取り出され、その結果形成された[N+V]型複合語はその項を選択する動名詞として機能するようになる。(18)では、クオリア構造内の CONST (構成役割) において、新たに目的語となる項(y)への影響が affect (e₃, e₂, y₂)によって示されている。この意味表示により、N から引き出された新たな項 y が複合語が表す行為の被影響者となり、先述のように、N に向けられる行為をそれ

⁷ 由本(2009) では「幅広い」「頭でっかち」のような形容詞・形容名詞について同様の分析を示している。

が構成するモノ全体に及ぶ影響という観点で捉えなおしていることが表される。

以上述べたように、このタイプの[N+V]複合語は、Vが表す行為を、その直接の対象Nのみならずそれが構成するモノ全体に影響を及ぼすものとして捉えなおすことを目的にした新たな動詞概念の形成である。本来の対象項であるNを複合語内に取り込み、項としての位置づけをはく奪するいっぽうで、そのNが前提として含んでいる意味項（部分－全体関係の全体にあたるもの）を複合語全体の項として引き出すことにより、複合語の項構造を新たに形成している。この点は、多くの言語に観察されているいわゆる所有者繰り上げの現象に通じるものがある。複合動詞形成が非常に生産的に起こる日本語では、この現象もまた語形成によって具現化しているのである。

6. 結語

本稿では、[N+V]型の複合名詞で「する」と直接結合する動名詞として容認されるものについて、その語形成の目的、動機という観点から考察した。これらはNとVの関係によって以下の4つに区別されるが、それぞれ複合語形成の目的も少しずつ異なっている。各節で述べたことをまとめると以下のとおりである。

①Vの付加詞が結合しているタイプ

もとのVのLCSに修飾要素を付加することでVの意味をより特定化した述語概念を形成する

②Vの項にあたるNが結合しVの結合価が減じられているタイプ

もとのVの項を一つ複合語内で満たすことにより、同じ事象でも、もとのVとは異なる焦点の当て方で捉えなおした述語概念を形成する

③Vの目的語にあたるものだが、行為を表すNが結合しているタイプ

Nをモノではなく行為として解釈し、それが表す意味をVの意味と合成し複雑述語を形成する。慣用句としてレキシコンで登録されているものを一語の動詞として具現化する場合もある。

④Vの項にあたるNと結合しそのNの意味項を新たな項として選択するタイプ

モノの属性を決定する一側面ないしは構成要素を表すようなNを複合語内にとりこみ、代わりにその意味項である全体にあたるモノを被動者とする新たな述語概念を形成する

主な参考文献

Baker, Mark 1988. *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*. Chicago,

University of Chicago Press.

伊藤たかね・杉岡洋子 2002. 『語の仕組みと語形成』 研究社.

影山太郎 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房.

影山太郎 1999. 『形態論と意味』 くろしお出版.

- Levin, Beth 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, University of Chicago Press.
- 小野尚之 2005. 『生成語彙意味論』 くろしお出版.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA, MIT Press.
- Sugioka, Yoko. 2002. Incorporation vs. Modification in Deverbal Compounds. *Proceedings of Japanese / Korean Linguistic Conference 10*, 496-509, CSLI.
- 由本陽子 2009. 「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』 209-229. くろしお出版.
- 由本陽子 2010. 「身体部分を表す名詞を結合した日本語の[N+V]複合語について」 宮本陽一編 『言語文化共同研究プロジェクト 2009: 自然言語への理論的アプローチ』 pp. 89-98. 大阪大学言語文化研究科
- Yumoto, Yoko 2010. Variation in N-V Compound Verbs in Japanese. *Lingua* 120:2388-2404.
- 由本陽子 2014. 「「名詞+動詞」型複合語が述語名詞となる条件」 岸本秀樹・由本陽子 (編) 『複雑述語研究の現在』 pp. 179-203. ひつじ書房